

エピソード

ニューヨーク時間十月七日午前11時45分、米英軍はアフガニスタンのテロ組織「アルカイダ」の訓練拠点とタリバンの軍事施設に標的を絞り、首都カブールやカンダハルなど三十カ所を爆撃した。攻撃開始はテレビを通じて伝えられたが、ほぼ平常を取り戻したニューヨークでは、おだやかな秋の日差しの下で日曜日を樂しむ家族連れの様子が目立った。まだクルマの通行を禁止しているキャナル・ストリートのバリケードの向こう側は、いつもの日曜日同様、郊外の街やニュージャージーからやってきた市民や観光客に溢れていた。

「ワン・ダラー、ワン・ダラー」

チャイナ・タウンの近くではこんな呼び声をかけながら、まだ空に高く伸びていた頃のトレッド・センターの絵葉書売っている。みやげ物店で人気を呼ぶのは、「ニューヨーク・ヤンキーズ」や「ニューヨーク・メッツ」の野球帽でなく、FDNY（ニューヨーク消防局）やNYPD（ニューヨーク市警）の文字の入った野球帽。なかにはオサマ・ビンラディンの写真に「WANTED（お尋ね者）」と記されたTシャツを売っている行商人もいる。値段は五ドル。

前日十月六日付の「ニューヨーク・タイムズ」紙は、この夏FBIエージェントが、二十人目の同時テロ容疑者と思われる人物の情報をつかみ、詳しい調査を要求していたにもかかわらず、FBI本部の高官がこの情報を握りつぶしていた、という信じられない記事を掲載した。

FBIは四機のハイジャック機に搭乗していた十九人の容疑者の名前と顔写真を発表していた。アメリカン航空一一便にもユナイテッド航空一七五便にも、さらにペンタゴンへ突っ込んだアメリカン航空七七便にも、それぞれ五人の容疑者が発見された。しかし、ペンシルベニアに墜落したユナイテッド九三便には四人しか乗っていないかった。「二十人目」の容疑者はユナイテッド航空九三便に搭乗する予定だったものが、何かの都合で計画を変更したのかもしれないという。九月十一日朝、彼はアメリカン航空七七便の発った首都ワシントンに近いダレス空港で目撃されている。

昨年一月、サウジアラビアの旅券をもってロサンゼルス空港に到着したこの人物は、五月にはサンディエゴで飛行訓練を受けていた。今年七月、再びケネディ空港から入国した時には、別の名前のサウジアラビア旅券をもっていた。彼がダレス空港を発ったアメリカン航空七七便に乗っていた可能性もあるという。いずれにせよ、同時多発テロに関係した容疑者があがっていないながら追及しなかったF

B Iの責任は大きい。さらに、F B Iとのいがみ合いのせいで情報交換をしなかったC I Aも、どこまでいい加減な仕事をしていたのか、とため息が出る。

ピートの妹キャサリンは、あの朝、パストレインに乗るためトレード・センター五号館に入ろうとした時、ニューヨーク市警の屈強な警官たちがバリケードを張って警戒に当たっていたと話している。バリケードは五号館だけでなく、南のリバティ・ストリート側からチャーチ・ストリートへ続く長いものだった。ニューヨーク市警は何かの情報をつかんで警戒に当たっていたことは明らかである。しかし、いくら地上を固めても、まさか空からテロリストがやってくるとは考えもしなかった。ニューヨーク市警はこの朝ばかりでなく、一週間ほど前から同じくバリケードでトレード・センターを包囲していたというのだが、そんなことはどこにも報道されていない。

米国航空局（F A A）の責任も重い。複数のジェット旅客機が、十五分近く同時にリーダー上で不可解な動きをしていたのにもかかわらず、不審を抱かなかつた。異常に気付いたのは9時過ぎ、ユナイテッド航空一七五便が南タワーに激突してからだった。さらに、どの空港の手荷物検査も実にいい加減なものだった。荷物の中身を調べるのは、各航空会社が依頼した民間会社に雇われた係員である。彼らには最低賃金に近い一時間五ドルくらいの給料しか支払われず、新任係員はメタル・ディテクターなどの機械の操作をビデオで見るなど、たった十二時間の訓練だけで仕事につくという有様。もちろん、F A Aが直接指導することもなかった。

九月十一日以降、手荷物検査は厳重になったと伝えられる。しかし、「ニューヨーク・デイリー・ニューズ」紙は十月はじめ、記者を派遣して新しい手荷物検査がどれだけ改善されたかを試してみた。果たして、ケネディやラガーディア空港では、飛び出しナイフやカッターナイフなどを難なく機内へ持ち込むことが出来たのである。

ハイジャックしたテロリストの凶器はカミソリと初め伝えられたが、カッターナイフだったことが明らかになった。十一日、他の旅客機の座席でふたつのカッターナイフが発見されたというニュースも背筋の凍るような話である。誰か空港内部に協力者がいたのか、テロリストがあきらめて凶器を置き去りにしたのか、いまだにわからないことは多い。

*大統領の失言

米国マスメディアの責任も大きい。九〇年代に入ってから、米国はすっかり内向きになって海外のニュースをあまり報道しなくなった。かつてニュース報道では定評のあったC B S放送が、世界各地の支局の多くを閉鎖し国内ニュース中心

に切り替えたのを皮切りに、ABCもNBCも同じような路線を追いかけるようになった。新聞や雑誌も大統領のセックス・スキャンダルの報道に全力を注ぎ、ケニアとタンザニアで起こった米大使館同時テロ事件や、この事件のテロ容疑で起訴された四人の裁判にも関心を示さなかった。その間に、テロリストたちは米国内で飛行訓練を受け、二〇〇一年九月十一日に向け、着々と準備を進めていたのである。冷戦後、アメリカ市民が内向きになったから海外ニュースが減ったのか、あるいはきちんとした国際報道が減ったから市民が興味を失ったのか、どちらだろうか。

とはいえわたし自身、テレビで放映されたオサマ・ビンラディンのインタビューやビデオを見て、米国が作り出した新しい「敵」に違いないとうさん臭い目を向けていたのだから、あまり大きなことは言えない。今から振り返ると、西側諸国のテレビに出演することによって、ビンラディンは各国に散らばったイスラム教徒ヘジハードを呼びかけていたに違いない。われわれはテロリストの意図も気付かず、うまく利用されたことになる。

九月十一日以降のメディアの報道に関して言えば、十三日ケネディとラガーディア空港で捕まった九人のアラブ系乗客のうち八人はすぐに釈放された。航空会社の偽ユニフォームを着ていたというのは、全くでたための報道だった。偽のパイロット・ライセンスをもっていたとされるひとりも十月三日に釈放されたとニューヨーク・タイムズは報じている。この人物はサウジアラビア航空のパイロットで、偽のパイロット・ライセンスを持っていたわけではなかった。

エンパイア・ステート・ビルなどが受け取った爆弾予告は、十一日以降の数日間になんと九百件あったという。それだけたくさん爆弾予告を、新聞がいちいち報道しなかったことは理解できなくもないが、それにしても、九百件もの予告があったことを書いたのは「ニューヨーク・タイムズ」紙のみで、それも小さなベタ記事だった。

ジョージ・ブッシュ大統領は九月二十日、上下両院合同会議で演説を行い、アフガニスタンのタリバン政権にビンラディンと彼の組織「アルカイダ」を引き渡すよう強く求めた。ホワイトハウス入りしてから初めての大統領らしい良い演説だった。九月十四日夕方、グラウンドゼロを視察、ベテラン消防士の肩に手を回しながらメガホンで話しかけたあの日から、大統領はようやく自分の言葉で自分らしく振舞えるようになった。

名門ブッシュ家の長男でありながら、自分が一家の「ブラック・シープ（変わり種）」であることを認め、その率直さで選挙戦を勝ち取った大統領である。時々には間違いや勘違いもある。

九月十七日、ペンタゴンで記者の質問に答え、こんなことを発言した。

「ビンラディンを捕まえたい。わたしは正義を求める。昔、西部にこんなポスタ

ーがあつたじゃないか……

『WANTED DEAD OR ALIVE』(お尋ね者、死んでいても生きていても懸賞金は支払う、の意味)」

これを聞いたピートが早速インターネットで調べると、なんと『WANTED DEAD OR ALIVE』という言葉は、ステイブ・マックイーン主演のテレビ番組の題名で、日本の題名は『拳銃無宿』だったのである。米国で放映されたのは一九五八年から一九六一年三月というから、日本でも少し遅れて放映されたのだろう。マックイーンを一躍ハリウッドのスターにした人気番組である。わたしはこの西部劇が大好きで、欠かさず見ていたものだ。それにしても、テロリストとの戦争というこの深刻な事態に、『拳銃無宿』を持ち出すとは……。

九月十八日には、ホワイトハウスが大統領の別の失言に対して世界にお詫びを申し出た。大統領は十六日の日曜日、報道陣の前に姿を現し、米国はこれまでにない戦争に突入すると語り、テロリストに対するこの戦争を「十字軍の戦い」と発言したのである。大統領としては「聖なる戦い」というようなつもりで簡単にこの言葉を使ったのだろう。しかし、十字軍は十一世紀から十三世紀、聖地奪回のためヨーロッパのキリスト教徒がエルサレムに派遣した遠征軍であり、中東諸国の人びとにとっては「イスラム教徒を殺害に來た憎きキリスト教徒軍」という意味になる。これでは、せつかくビンラディンをはじめとする国際テロリストとの戦いであると言って、イスラム世界の協力を求めている米国としては、深くお詫びをする以外にどうしようもなかった。

わたしはブッシュ大統領のファンではないが、同時多発テロらしい、パキスタンや中東諸国はじめヨーロッパ諸国などに働きかけてきた外交努力で彼を少し見直した。コリン・パウエル国務長官の方針を取り入れて全体の指揮を取っているところは、好感すらもてるほどだ。とにかく、主だった閣僚のなかで戦争に行つたことのあるのは、パウエル長官とラムズフェルド国防長官のみ。大統領もディック・チェイニー副大統領もジョン・アシュクロフト司法長官も弾の下をくぐつたことがない。

これに比べ、オサマ・ビンラディンは対ソ戦で実戦経験を積み、いらい十数年、テロ攻撃のチャンスがうかがってきたのである。

*イスラム教徒への求心力

「全能の神によってその心臓をえぐられたアメリカよ、おまえたちの偉大な建物は破壊された。神に感謝。アメリカは北から南、東から西に至るまで恐怖にのいている。すべて全能の神に感謝する。アメリカがいま味わっているものは、われわれが味わってきたもののほんの一部にしかすぎない」

米英軍の攻撃が始ってから放映されたビンラディンのビデオ・メッセージは、あまりに過激である。心臓が凍るような思いでわたしも聞き入った。

「われわれイスラム国家は、アメリカがいま味わっている同じ恥辱と不名誉を八十年間も味わってきた。われわれの息子は殺され、われわれの血は流され、われわれの聖地は汚された。」

神はアメリカを破壊するイスラムの先兵たち、イスラム教徒の前衛グループに祝福を与える。わが神は彼らを祝福し、天国の最高の場所を割り当ててくださる。神は唯一その力と権利をもつものだから」

一九九三年のトレード・センター爆破事件の主犯として逮捕されたユーセフが、広島と長崎のことを語ったように、オサマ・ビンラディンも日本についてここで言及している。

「ブッシュとその閣僚は（これが）テロリズムとの戦争だと言って世界に嘘を申し立てている。世界の果てにある国家、日本では若者も年寄りも何百何千という人びとが殺された。（しかし米国は）これは世界的な犯罪ではないと言う。……しかし、ナイロビやダルエスサラーム（一九九八年に米大使館が爆破されたケニアとタンザニアの首都）で十人以上が殺されると、彼らはアフガニスタンとイラクを空爆した。神を信じない世界の代表、異教徒のシンボルであるアメリカと同盟国は（これが犯罪でない）偽善を申し立てる。」

すべてのイスラム教徒よ、われらの宗教を守るために立ち上がれ。……アメリカにこう言いたい。パレスチナに平和がもたらされ、モハメッドの土地から異端者の軍隊が撤退するまで、アメリカに平和は訪れないのだと」

米国にこれだけ激しい攻撃の刃を向けた者がかつていただろうか。自己の信念だけが唯一正しいと考える原理主義者ほど危険な存在はない。その危険な信念のなかにあるアメリカ「一国主義」に対する嫌悪、アメリカの傲慢さに対する憎悪が、各国のイスラム教徒にどれだけの求心力をもっているか理解できるだけに、もつと恐ろしいと思う。この戦争を通じて、アメリカ人が彼らの「一国主義」や傲慢さを少しでも振り返ることができたら、とわたしは思う。しかし、ビンラディンはアメリカ市民にそんな余裕など与えず、次の報復テロで迫ってくるだろう。米当局は彼らが生物化学兵器の実験を行っているという確かな情報をもっているかと伝えている。フロリダで発見された炭疽病の患者がテロによって感染したものであるのかどうか、現在の時点ではわからない。同様に、ニューヨークのNBC本部やネバダ州リノの「マイクログソフト」社に送られた炭疽菌はテロによる仕業なのかどうかいまだ不明。「ニューヨーク・タイムズ」紙やフロリダの「セント・ピーターズバーグ・タイムズ」紙に届いた封筒のなかの粉末が、テロリストの送った炭疽菌なのかも、現在のところ、わからない。しかし、テロリストが飛行機を使って化学物質をばら撒く可能性もあるし、地下鉄や建物の換気システムに菌の散布

を行うかもしれない。

実はわたしは細菌戦部隊として知られる旧日本軍の「関東軍第七三一部隊」について取材・調査を進め、月刊誌『新潮45』八、九、十月号に長編ノンフィクションを発表したところだった。現在の日本が自国の拠つて立つところも明確にできない曖昧さを抱えているのは、戦後のアメリカ軍による占領時代にそのタネが撒かれたからに違いないと思ひ、この数年、占領時代について調べてきたその一環である。戦争犯罪には問わないという密約のもと、米軍がいかにこの秘密部隊を追及し、彼らの研究データや実験結果などを入手する取引を成立させたか、という戦後史である。

数年にわたつてメリーランド州カレッジ・パークにある米国立公文書館へ通ひ、関係者にインタビュウしてきたが、まさか自分が米国の生活のなかで、炭疽菌やペスト菌、コレラ菌などによる生物兵器やサリン、マスタードガスなどの化学兵器の被害を心配して暮らすことになるとは考えもしなかった。それも長編ノンフィクションを発表した途端、こんな事態になつたのだから、皮肉というより何かの因縁を感じてしまうのは考え過ぎだろうか。もつとも、「湾岸戦争」らしい米国の一部では生物兵器への関心が高まつていた。そういうマニアックな研究者やジャーナリストには、この部隊の生みの親で指揮官でもある石井四郎軍医中將も七三一部隊もよく知られる存在なのである。

*自由の女神の見える公園

九月十二日付に始まる膨大な新聞を読み返してみると、十一日、ジュリアーニ市長は確かに十四丁目以南に住む市民の緊急避難を命令していた。事件後の一週間、ニューヨークの犯罪は激減したと言われるが、記念品として消防士の靴や帽子などを盗む心無い犯罪が起こつたという記事もある。もつと酷いのはグラウンドゼロの灰だと言つて、偽物を行方不明者の家族に売りつける詐欺師がいたという報道である。

なかには心温まる記事もある。隣のトミーの話に出てきた盲導犬を連れてビジネスマンが無事だったことを伝える記事が「ニューヨーク・タイムズ」紙に掲載されていた。北タワー七十一階からオマー・リベラさんを救つたのは、黄色いラブラドル・リトリーバーのサルティだった。爆発の後、サルティもとても緊張していたというが、逃げようともせず、しっかりリベラさんの横でご主人を誘導したという。

そういえば、わたしがエリザベスだと勘違いしたのは、緊急避難するよう声をかけに来た彼女の友達だった。いつも身綺麗にしているエリザベスは人が違つたような顔つきをしていると思つたが、文字通り、違う人だったわけである。

あの日から四週間たった十月九日、ピートとわたしは再び現場近くに足を向けてみた。美しい秋の日だったが、風が強くてめつきり寒くなってきた。汗ばむようだったあの日から気温が十度も下がった感じである。チャーチ・ストリート一四九番地の以前のアパートを訪ねると、初めて角の食料品店が開いていて、店主のリーさんが腰をかがめて商品の点検をしていた。わたしたちを見ると、懐かしげな表情を浮かべ、

「いやあ、三週間も店を閉めたんですよ」

とにこやかに答えた。店に積もった埃や灰を掃除するのに、二十五人も駆り出して三日間かかったという。上階のロフトの住人は二家族が戻ってきたというが、何組かはもう引越すことになったという話だった。どの部屋も汚れが酷いらしい。

インド系のカバン屋の主人は出かけていたが、彼のパートナーが出てきた。

「あの日は店を閉めずに逃げちまったものだから、夕方になって忍び込みようやく鍵をかけたんです。何も盗まれていませんでした。みんな無事ですよ」

ベッシー・ストリートまで行ってチャーチ・ストリートとの角へもう一度立つてみたいと思っていた。トレード・センターの二本のタワーが燃えているのを見下から見つめ、南タワーの崩壊を目撃したあの地点である。しかし、ベッシー・ストリートはまだ警察の厳重な取り締まりの下に立ち入り禁止だった。

グラウンドゼロの残骸の撤去作業は驚くほど進んで、もう煙も見えないし匂いもしない。丸焦げになったWTC五号館が黒い焼け跡となつて残っている。その横に佇む「セント・ポールズ・チャペル」は奇跡的に無傷だった。いまでも食べ物や僅かの休息を求める救急隊のセンターとして使われている。もちろん、ピートが一時的に避難したベッシー・ストリート二十番地の元「ニューヨーク・イブニング・ポスト」紙の建物も健在である。

事件から一週間ほどたったある日、郵便局へ行こうとしたわたしは、チャーチ・ストリートで十五メートルもの長さの太い鉄柱にお目にかかった。「WTC1」というチョークの印がある。その太い柱が折れて一号館から落ちてきたことは明らかだった。もし、あの鉄柱がベッシー・ストリート二十番地の建物の上に落つてきたら……今頃はわたしも犠牲者の家族として名を連ねていたことになる。

「あそこにはトレード・センターが建つ前、ワシントン・マーケットという市場があったんだよ。電気製品のパーツなんかを売っていて、ブルックリンからよく遊びに来たものだ。シリアから来た移民が働いていてアラビア語の新聞を読んでいたのを覚えているよ。トレード・センターの建設をめぐる、ずいぶん反対も多かった。あのシリア人たちは結局、ぼくの住んでいたブルックリンの近くに移ってきたんだ」

ピートが思いついたようにこう口にした。わたしはそれを聞いて初めて納得す

る気がした。ガボとよく散歩した公園や「バッテリー・パークシティ」は、六十
五フィートの深さのトレード・センター地下七階分の土で作られた埋め立て地だ
ったのである。あの公園に「ワシントン・マーケット・パーク」という名前がつ
けられたのは、そのためだった。

ジュリアーニ市長やパタキ州知事はワールド・トレード・センター再建を力強
く主張している。しかし、この跡地にふさわしいのは、緑の芝生と噴水や犠牲者
や行方不明者の名前を刻んだ石碑のある広い公園以外に何があるだろうか。ここ
に石碑のある公園がつくられれば、「ワシントン・マーケット・パーク」の芝生の
向こうにハドソン河が見渡せ、その先にはたいまつを掲げる自由の女神が視界に
入るではないか。行方不明の人びとの家族はここへ足を運び、愛する人に想いを
馳せ、石碑の名前を指でなぞりながら、その景色に初めて心が和む思いがするに
違いない。わたしはそんな公園を思い描きながらピートの手を取った。